

[資料]

2019年度関門地域共同研究会 成果報告会 第2部シンポジウム 「関門地域における“文化財を活かした地域活性化”の可能性」開催記録

日時： 2019年7月25日（木） 14:00～16:30（うちシンポジウム15:05～16:30）

会場： 西日本総合展示場新館（AIMビル）3階 314・315会議室

主催： 関門地域共同研究会

開催趣旨： 北九州市と下関市が合同で文化庁に申請した「関門“ノスタルジック”海峡～時の停車場、近代化の記憶～」が2017年に日本遺産に認定された。関門地域の多くの歴史的な建造物や、映像作品の舞台にもなっている街並み・景観等の資源を連結させ、魅力ある圏域づくりや情報発信に取組み日本有数の滞在型観光地を目指すこと、また住民主体の地域活性化推進をめざし、様々な活動が行われている。

この日本遺産に関する動きのほか、関門地域においては、歴史的資産も活かしたインバウンド促進、産業観光や夜景観光の推進、「まちあるき」による体験型・交流型の観光の創出など、歴史や文化を活かした様々な観光関連の取組が活発に行われている。

そこで、「関門地域における“文化財を活かした地域活性化”の可能性」をテーマに、関門地域における取組の現状や、関門地域の文化財の持つ力を地域活性化につなげるために必要な事項等について意見交換し、今後の関門地域のまちづくりにおけるヒントを発信することをめざす。

パネリスト： JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏
下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏
北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏
下関市立大学 経済学部国際商学科4年 福田 悠美
北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類4年 南 祐輔
コーディネータ： 北九州市立大学地域戦略研究所教授 南 博

参加者数： 60人

1. 趣旨説明

〔北九州市立大学 南 博〕

それでは、第2部のシンポジウムを始めます。シンポジウムに関しましては、お手元の配布資料の中にある、「第2部シンポジウム」と書いた紙、それから後ほど登壇者の説明に使っていただく資料として、「日本遺産探Q会での活動を通じて」という資料。それから、門司港などの写真が載ったチラシと電子パンフレット。これらをご覧いただきながら、シンポジウムを進めていきたいと思っております。

まず、今回のシンポジウムの趣旨について説明申し上げます。先ほど私の研究報告で述べましたように、北九州市と下関市が合同で申請した「関門“ノスタルジック”海峡～時の停車場、近代化の記憶～」は、2017年に日本遺産に認定されました。住民主体の地域

活性化をめざして、様々な活動が行われています。この日本遺産に関する動きのほか、関門地域においては、歴史的資産も活かしたインバウンド促進、産業観光や夜景観光の推進、「まちあるき」による体験型・交流型の観光の創出など、歴史や文化を活かした様々な観光関連の取組みが活発に行われてございます。そこで、「関門地域における“文化財を活かした地域活性化”の可能性」をテーマに、関門地域における取組の現状や、関門地域の文化財の持つ力を地域活性化につなげるために必要な事項等につきまして、パネリストの皆様方と意見交換させていただいて、今後の関門地域のまちづくりにおけるヒントを発信することが、今回のシンポジウムの趣旨でございます。

2. 登壇者自己紹介

〔北九州市立大学 南 博〕

今回の開催趣旨に沿う、それぞれ関連分野でご活躍の方々に、本日お集まりいただきまして。それでは御着席順に、まずは自己紹介をお願いいたします。

〔JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏〕

まず、この場を借りてでございますけれども、門司港駅の復原事業につきまして、北九州市さん、文化庁さん、関係の機関の方々、あるいは地元の方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

縁があって、私、この場におりまして、昨年1年間は門司港駅の関係で、中にお店をつくるという仕事をJR九州のほうで担当しておりました。そしてこの4月から、北九州にちょっとは詳しいだろうということで、小倉の駅にありますステーションホテルという所におります。併せて、私、下関市の唐戸の出身でございまして、小中高と下関におりました。そして、その後、大学に入りまして、こちらにいらっしゃる南先生と出会いまして、4年間、都市計画、まちづくりの勉強をしました。よろしくお願ひします。



左から南博（北九州市立大学）、黒木氏（JR九州ステーションホテル小倉）

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

皆さん、こんにちは。下関市教育委員会教育部文化財保護課の藤本と申します。今、職場で日本遺産の下関側の担当をしております。日本遺産への申請からずっとこの仕事に関わっておりまして、今年でもう4年目ということになりました。今日は、よろしくお願ひいたします。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

北九州市観光課で、主に国内からの観光客誘致を担当しております、泊と申します。よろしくお願ひします。仕事柄、市外の旅行会社さんですとかに、関門地域を観光素材とし

てPRするようなことも多いですので、今日はそういった視点からお話できればと思います。

それから、本日、現在、観光課でパブリックコメントを募集しております「宿泊税」の資料をお配りさせていただいております。「考え方（案）への意見提出用紙」をお配りさせていただいておりますので、一言でも結構ですので、ぜひご記入いただきまして、お帰りの際にご提出いただければ助かります。よろしく願いいたします。



左から藤本氏（下関市教委）、泊氏（北九州市）

〔下関市立大学 経済学部国際商学科4年 福田 悠美〕

下関市立大学経済学部国際商学科4年の福田悠美と申します。私は、大学で「日本遺産探Q会」という、日本遺産を学生の立場で発進していく活動を行っているサークルに現在所属しております。活動の方は後ほど詳しく説明させていただきます。本日はよろしく願いいたします。

〔北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類4年 南 祐輔〕

皆さん、こんにちは。北九州市立大学地域創生学群4年の南祐輔と申します。同じ南ですが、南先生とは全然血縁関係とかないですが、今回ご縁がありまして、この場に立たせていただいています。私は、現在北九大に通っておりますが、出身が下関の長府という場所で、現在も住んでいますので、下関市民として、そして北九大生として、今日は活発な議論に参加できたらと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

〔北九州市立大学 南 博〕

皆さん、どうもありがとうございました。それでは、本日はお手元の資料に論点を4つほど挙げてございます。それに基づいて、このあと進行させていただきたいと思っております。

3. 論点1： 関門地域の文化財、および関連する観光の特徴、魅力

〔北九州市立大学 南 博〕

まず、最初の論点1でございます。「関門地域の文化財、および関連する観光の特徴、魅力」ということで、この論点につきましては、行政のお立場、あるいは宿泊事業者のお立場から、問題提起も含めてお話いただければと思っております。それではまず、文化財行政のご専門家の藤本さんから、お願いいたします。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

下関のほう为中心のお話になるかもしれませんが、お話をさせていただきます。

関門地域の文化財ということですが、下関、北九州、特に門司は海に囲まれておりまして、歴史的なエピソードが各時代とても豊富にございます。特に関門海峡沿いは、

皆様よくご存じのとおり平家物語の壇ノ浦の合戦が有名ですし、関連しまして下関だと安徳天皇阿弥陀寺御陵とか、耳なし芳一の伝承が有名な赤間神宮がございます。こちらの印象的な赤間神宮水天門は昨年、国の登録有形文化財になりましたし、平家物語の長門本であるとか絵画資料など、国・県の文化財の指定を受けているものがたくさんございます。資料館もありますので、そちらは見学できるようにもなっております。

また、長州といえば幕末が有名で、お話はきりがないのですけれども、代表的なところでいきますと、やはり下関戦争の舞台になりました史跡長州藩下関前田台場跡などに代表される幕末のエピソードが残る場所も関門海峡沿いに多数点在しております。なお、文化財ではありませんけれども、壇ノ浦のみもすそ川公園には大砲が復元されておまして、幕末の関門海峡沿いの台場をリアルに感じられる観光スポットになっています。

そして、近代になりますと、日本遺産の構成文化財になっております旧下関英国領事館や旧秋田商会ビル、門司港側であればJR門司港駅と旧門司三井倶楽部という重要文化財も2件もございます。そういった豊富な近代建造物も、最近では日本遺産の認定を契機に…、門司港のレトロ地区は十分認知度も高かったですけれども、下関側では今回の日本遺産認定を契機に近代の建造物の存在感が増してきたのではないかなと思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。では次に、観光行政のお立場から、泊さんをお願いします。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

観光課では、市外のPRブースへの出店ですとか、あとは旅行会社にセールスなどを行っているのですが、関門地域の知名度は非常に高いと感じております。北九州市の存在は知らなくても、これはこれで少し課題ではあるのですが、本州と九州の間にある関門海峡とか、門司港レトロ地区ですとか、唐戸市場や下関とか、その辺のことは非常に広く知られていると感じています。

実際に、多くの文化的、歴史的に価値のある建物が徒歩圏内に集積していて、バス、トロッコ列車、船とかで気軽に移動できる範囲に集まっていて、同時に美しい海峡の景色もあります。それに加えて食事とか買い物も楽しめるといった観光地が、福岡県内や山口県内まで広げても周辺にはあまりないので、とても観光地として貴重な存在で大切な観光資源だと考えてPRを行っています。

そういうものに加えまして、門司港エリアですと門司港駅のリニューアルオープンですとか、レトロ地区のライトアップをどんどん進めております。あとは9月には関門海峡ミュージアムもリニューアルオープンするということで、さらにバージョンアップをどんどん続けているところでありますので、まだまだ観光地としての高いポテンシャル、潜在力を持っている地域ではないかと考えております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは、門司港駅の復原工事などでもご活躍されてきた黒木社長、お願いします。

〔JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏〕

門司港駅について、それから後半で観光面の話をしていただければと思います。

先ほど南教授の方から説明のあったパンフレットがございますけれども、駅ご利用の観光客の方も、こうした空間を写真に収められる方も結構いらっしゃると思います。駅の中のホームに椅子もなければ自動販売機もなく、「もじこう」というサインくらいしかなく、これはわざとそうなっているのですけれども、こうした風景を撮っていただいているのだと思います。

門司港駅はご存じのように、1914年、大正3年に今の駅舎ができて、約100年後、2012年に工事が始まりまして今年3月に復原工事が終わったところですが、まだ一部、工事が残っておりまして、ご迷惑をお掛けしております。私は、駅機能以外をどうするかということを担当しておりまして、先ほどのアンケートでもありましたけれども、やはり「食・グルメ」といったものがやはり観光の一つのポイントになるのではないかと、ということで、1階にはスターバックスコーヒーさん、2階にはみかど食堂をつくりました。

1階のスターバックスも通常のスターバックスではなくて、やはり歴史的な建造物の中にあるということで、京都ですとか、九州ですと鹿児島島の仙巖園等々にもございますけれども、歴史を感じさせる内装、室外等にしております。中に入っていたいた方も多と思うのですけれども、列車のヘッドマークですとか、あるいは列車のプレート、レールをモチーフにしたような内装になっております。

2階のみかど食堂については、アイデアとしてはすぐに出たのですけれども、なかなか当時の資料がないということで、門司にお住まいでガイドをされている内山さんという女性の方がいらっしゃいまして、この方のお父様が昔のみかど食堂の Cock 長をされていたということで、色々なお話を聞かせていただいたり、写真を見せていただいたりということでの復原をいたしました。併せて、JR九州がやっておりますスイーツトレイン「或る列車」の監修をしていただいています成澤さんという東京の有名なシェフの方がいらっしゃるのですが、その方に料理の監修をしていただいて、今のようなお店をオープンさせたということになっております。重要文化財ということで、お店をつくるにあたってなかなか難しいところもあったのですけれども、まずはよくできたのではないかなと思っております。

それから観光に関してですけれども、今、小倉でホテルを担当しておりますけれども、ビジネスユース、出張の方はかなり小倉も多いのですけれども、今後は観光客、特にインバウンドの方も含めて増やしていこうという取組みを行っております。参考までに、九州観光推進機構がトリップアドバイザーという世界的な口コミサイトの投稿分析を行った結果では、北九州でどのような施設の名前が挙がっているかということ、九州鉄道記念館、関門海峡の2つが挙がっておりました。一方で、門司港駅や他の施設名が挙がっておりませんでしたので、もう少しPRする必要があるのではないかなと思っております。余談ですが、北九州で投稿が多かった施設が河内藤園、それから満足度が高い施設がいのちのたび博物館でした。こういったところも今後の参考にしていきたいと考えております。

〔北九州市立大学 南 博〕

どうもありがとうございます。

今、それぞれ文化財行政、観光行政、民間事業者のお立場からお話をいただいたところ
でございます。先ほど、第1部での私の研究報告のところでも少し述べさせていただきました
が、国のほうでも今、文化財を活かした地域活性化ということで、法改正ですとか、
色々な事業展開も行われております。現在の国の成長戦略などを見ましても、文化に関す
る施策というのは、「文化・スポーツ・観光」ということで括られて、成長戦略の重要な
役割を果たすものと位置づけられておまして、文化財について、大切なものを後世にも
残していくということを重視しつつ、いかに地域活性化に役立てていくかということにつ
いて様々な取組みが行われております。関門海峡には色々な資源もありますし、可能性も
ある、ということかと思えます。



全登壇者

4. 論点2： 大学生による活動紹介

〔北九州市立大学 南 博〕

今、関門地域の文化財、および関連する観光の特徴、魅力について行政や民間事業者の
お立場からお話をいただいたところでございますが、これらに関し北九州市立大学、下関
市立大学の学生も様々な取組みを行っております。その点につきまして、論点の2つ目と
して、大学生による活動紹介を行っていただきたいと思えます。まず、下関市立大学の福
田さんのほうから、文化財を活かした地域活性化に関連する活動内容や、その活動を通じ
てお考えのことなどについてお話いただければと思えます。

〔下関市立大学 経済学部国際商学科 4年 福田 悠美〕

私からは、日本遺産探 Q 会での活動を通じてということで、報告をさせていただきたいのですけれども、お手元にカラー版の資料があると思うので、そちらのほうを見ながら聞いていただければと思います。報告の流れとしては、まず、日本遺産探 Q 会での活動の紹介と、その活動を通して感じた日本遺産の魅力及び文化財の魅力について、私の意見を報告させていただきたいと思います。

まず初めに、私が所属している日本遺産探 Q 会とはどういったものかということ、簡単にご説明をさせていただきたいと思います。このサークルは、私の 1 つ上の先輩が共同自主研究という研究で、「域学連携による日本遺産の魅力発進」をテーマに研究をしていたのですが、この研究だけで終わらせることなく、日本遺産を通じてもっと地域に貢献したいという思いを持ち、このサークルを設立したという次第でございます。

このサークルは、日本遺産の認知度を向上させるという目的で活動を行っておりまして、フィールドワークであったり、地域の方にヒアリングしたりというふうに調査や研究を行い、そこで得た日本遺産の魅力を発信するために、私たちも大学生として楽しみながら様々な活動を行っているサークルでございます。

では、具体的にどのような活動を行ってきたかということで、次のページに移ります。具体的には 4 つの活動を行ってきたと思っております。例えば、地域のイベントであれば、江戸周辺で行われているキャンドルナイトであったり、日本遺産構成文化財の六連島灯台がある六連島での灯台の公開イベントに参加したりですとか、パンフレットの作成というところに関しましては、配布資料に実際に作成したパンフレットを載せているのですけれども、大学生に見て感じていただきたい、学んでいただきたい部分をピックアップしたりですとか、大学生から見た魅力というものを私たちなりにまとめたパンフレットを発行しております。さらに、かるたや紙芝居の作成、あとポスターなども作っているのですけれども、そちらのほうは資料 5 ページ目に実際に作成したものを載せているのですが、こういったものもイベントの際に展示していただいたりして、活用していただいているものになります。あとは、インスタグラムであったり、ツイッターであったり、色々使って私たちの活動をたくさん発信している状況でございます。

続いて、この活動を通して感じたことについて、配布資料 6 ページ目から報告をさせていただきたいと思います。私自身、日本遺産探 Q 会に所属して活動する中で、日本遺産という文化財であったりストーリーというものが、私が今、活動している下関市にフォーカスを当ててしまうのですけれども、新たな魅力になり得るというふうに活動を通じて考えました。これが誰にとって、どんな魅力かということになるのですが、大学生、市民、観光客の 3 つの視点から魅力があるのではないかというふうに、私自身考えました。

次のページです。まずは大学生にとっての魅力というところになるのですけれども、私自身、大学生としてこういった活動を通して、文化財やストーリーというものは、学びや交流になるという魅力があるのではないかと考えました。例えば、こちらに例を載せているのですけれども、先ほど紹介した「下関“成長”物語」というタイトルでパンフレットを作ったのですけれども、主体的に活動してきた私たちにとっては、こちらの作成を通して、自分たち自身が地域を学ぶことができたり、ヒアリング調査を通して地域に住んでいる方とたくさん交流をさせていただく機会が生まれました。そういったことを通して、こ

の活動の楽しさを見いだしております。さらに、私たちが作った物を他の学生にも発信するという点に関して、特に下関市立大学は県外から来た学生が約8割程度いますので、初めて下関市に来た学生に対してこういったパンフレットを使って、実際に授業でも配っていただいているのですけれども、学生が学びやすいように簡単にまとめた面白いパンフレットを見ながら、初めて来た下関の歴史や文化を学べる、学びの部分になっているのかなと思っております。

続いて、市民としての魅力ということで、資料8ページ目に移ります。私も実は下関市民でありまして、20年近く下関に住んでいるのですけれども、この日本遺産の活動を通して地域の再発見につながり、地域への誇りをすごく持つことができたと思うので、そういった魅力があるかなと思います。下関だと、角島だったり唐戸市場だったりという、自然とか海産物が結構魅力として注目されているかと思うのですけれども、それだけではなくて、日本遺産を知ることによって下関にもこのような文化的な歴史的な魅力があるのだということ、私自身再発見いたしました。例えば資料に載せている旧下関英国領事館は、今、日本に存在する最古の領事館の建築物でありまして、国の重要文化財にも指定されております。こういったものが下関にもあるということは、私自身、活動するまで全く知らなかったもので、こういったように地域を見直し、地域への誇りや愛着が生まれる、そして、市民教育にもつながるといった魅力があるのかなと思っております。

最後に、観光客にとっての魅力ということで、私は観光客ではないので、大学生や市民への魅力を踏まえて、そこと重なる部分になるのですけれども、日本遺産の文化財やストーリーというのは、「楽しみ」になるのではないかなと考えました。前者の大学生・市民とつながるのですけれども、今、観光客というのは、ただおいしいご飯を食べて、きれいな景色を見てというだけではなくて、地域の人と交流したり、地域を学んだりということが、観光客に求められているかと思えます。ですので、先ほどの報告にもあったように、地域の方と交流できる機会であったり、色々なことをこの遺産を通じて学んで、観光客の知的好奇心を満たすツールになるのではないかと考えました。例えば、文化財の1つである、やまぎん史料館の館長さんであったり、私もたくさんお世話になった六連島の方々は、すごく親しみやすく、色々なことを私たちにも教えてくださいました。本当に「人の魅力」だと思うので、こういった部分も日本遺産そして文化財の新たな魅力ではないかなと思います。

私の報告のまとめといたしましては、日本遺産、文化財というのは、市民にとって「再発見・誇り」、大学生にとって「交流・学び」、そして、この2つと重なる部分で、観光客にとって「楽しみ」という魅力があるのではないかと考えました。

私からは以上です。ありがとうございました。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。大変素晴らしい活動を実施しておられるなと思えました。それでは、次に、北九州市立大学の南さんからお願いします。



左から福田(下関市立大学)、南祐輔(北九州市立大学)

〔北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類4年 南 祐輔〕

私は配布資料はございません。口頭で活動の紹介をさせていただきたいと思います。まず、私が所属しております地域創生学群では、地域課題に対して、様々な面や分野から活動に取り組んでおります。子どもの教育ですとか、交通の面から、まちづくり、ごみひろいですとか、さらに、福祉ですとかスポーツなどの面から地域活動に取り組んでおりますが、私がこれまでメインで取り組んできましたのは、「まちあるき」の分野です。まちあるきという言葉をご存じでない方もいらっしゃると思うのですが、ブラタモリを思い浮かべていただくと一番近いかなと思っております。

具体的な活動内容としましては、主に、私は小倉、特に魚町の辺りで取り組んできました。ガイドブックですと多くの市外・県外の方に知られているようなスポットやお店などを紹介するのはもちろんですが、そのようなお店も、これまで知られていない視点から地元の人しか知らない情報ですとか、ガイドブックに載っていないような情報をガイドして、参加者の方に聞いていただくというものに取り組んできました。それ以外にも、これまで、小倉駅の新幹線口ですとか、北九州モノレールの沿線沿いでのマップの作成ですとか、ちょうど今、泊さんのおられる北九州市観光課の方と一緒に、環境修学旅行という環境の面から北九州の魅力を紹介していくという活動も取り組んできました。

今回、テーマが「文化財」ということですので、その中で文化財と関連した取組みを紹介します。ある旅行会社さんとコラボレーション企画をしまして、関東から修学旅行生を北九州に誘致しガイドするということがありました。この活動では、従来のようなバスガイドさんですとか、地元の、いわゆるボランティアガイドの方にガイドしていただくのではなく、まちあるきの手法を取り入れてガイドを行いました。具体的にいきますと、門司港エリアで活動を行ったのですが、門司港駅ですとか、旧大阪商船ビル、旧門司税関などのスポットは素晴らしい歴史的価値があるのですが、このような歴史的価値だけではなく、まちづくりですとか、景観の面ではどうだろうかという視点で、ガイドを高校生に行い、高校生と一緒に街を歩きながら、門司港について考えるということを行いました。さらに門司港レトロエリアだけではなく、栄町銀天街といった、いわゆる観光地からは一歩外れた場所も高校生と一緒に歩き、門司港を一つの街として捉え、どのような魅力が隠されているのかということも高校生と一緒に考え、ワークショップを三宜楼の広い部屋で行いました。この三宜楼でのワークショップについては、高校生や高校の先生方からかなり好評をいただきました。

このような活動を行ってきた中で、幾つか私が思ったこと、課題だなと思ったことをご紹介します。まず、ストーリー性がどれほど必要なのかということを感じました。今回の「関門“ノスタルジック”海峡」も、北九州や下関に点在する様々な歴史的価値のあるスポットを、歴史、近代化ですとか文化財の価値としてストーリーをつないでいくことがどれだけ有効なのかということを考えました。

次に、地元の方の交流・協力が、まだまだ足りていないのかなということを感じました。地元の方、特に長年住んでいらっしゃる方は、この門司港にあるスポットや下関のスポットについても、「昔からあるもの」という認識で、なかなか歴史的価値の重大性を感じていないが故に、あまり乗り切れない、と言いますか、協力をお願いしても「まあ、そんなもんだよ」みたいな、ちょっとさみしい声を聞くことが幾つかありました。いかに県外や

市外の方に魅力を伝えていくか、ということも重要ですが、まずはこの地元の方がどれだけ誇りに思っているかということも重要であると感じました。

そして、特に若い世代の目線と言いますと、なかなか若い世代は歴史的価値というものにあまり目を向けない、と言いますか、どうしても難しく感じてしまう大学生ですとか高校生の世代に対して、いかに歴史的価値を伝えていくことができるのかというのが、かなり大きな課題であるなど感じました。

まだまだ幾つか課題はあると思うのですが、一人でも多くの地元の方がこの魅力を伝えられるようにすれば、市外や県外の方にも、この関門エリアの魅力が伝わっていくのかなと感じていますし、私も大学生の期間は残り1年ありませんが、卒業してからも、関門エリアに住んでいる者として少しでも携わっていただけたらと考えております。私の発表は以上です。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。北九州市立大学では様々な取り組みを行っていて、かつ、そこから色々な課題の考察や将来に向けた展望も考えている、ということをご報告をいただきました。

では、両大学の学生にお話をいただきましたので、それぞれの行政の方から一言ずつご感想をいただきたいと思います。まず、下関市立大学の取り組みに関して、下関市教委の藤本さんのほうからコメントをいただければと思います。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

下関市立大学の日本遺産探Q会さんは、立ち上げられた時から私も随分お世話になっておりまして、何より本当に自ら自主的に動いていただいています。あたたかい、ありがたい活動だと思っております。特に、パンフレットを作っていただいたり、かるた、紙芝居という「物」を自ら作り上げていってくださっているのが素晴らしいということと、それから六連島の、それこそ地元に着した活動を継続してやっていただいていることは、なかなか行政では手が届かないようなところまで活動していただいております、本当にありがたいと思っております。

今、下関市立歴史博物館で日本遺産巡回パネル展をしておりますけれども、そちらに探Q会さんが作られているかるたと紙芝居と一緒に展示させていただいております。大学と行政の活動の発表の場がうまく融合していけており、関門海峡日本遺産協議会の活動としても、お互いWin-Winな関係でいっていただけたらと思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは、北九州市立大学の取り組みに関して、北九州市観光課の泊さんのほうからコメントをいただければと思います。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

北九州市立大学の地域創生学群の皆さんは、自主的にまちあるきのボランティアガイドさんとかをやっていただいて、非常に課題意識も持って学生らしい切り口で色々やってい

ただいでいて、とても素晴らしい活動をされていると感じています。

先ほど話の中で、地元の方の認識がなかなかちょっと、という話もありましたけれども、結構色々なところを見ていると、外の方が評価して、改めて地元の方がそれに対して誇りを持っていくというような道筋もあります。また、旅は昔の団体旅行からどんどん今、個人旅行に旅行の形態が変わってきている中で、旅の印象というものを大きく決めていくのが、人との交流とかの占める割合が、結構大きくなってきているということが色々な調査結果でも出てきています。そういうところに学生の皆さんが、今、地道に取り組んでいらっしゃるガイドですとかが利いてくるのではないかなと思っています。

そういうことで、外からの評価が高まって、それが還ってきて地元の方の認識を変えていくという、そういう好循環を生んでいけるように感じて、すごく素晴らしい活動ではないかと感じました。

〔北九州市立大学 南 博〕

どうもありがとうございました。

5. 論点3：文化財を活かした関門地域活性化に向けた課題

〔北九州市立大学 南 博〕

それでは、次の論点に進みたいと思います。論点の3つ目は、「文化財を活かした関門地域活性化に向けた課題」でございます。論点1と2では、関門地域における文化財を活かした観光の特徴や魅力、あるいは下関市立大学、北九州市立大学における活動の事例紹介の話がありました。それらを踏まえて、今後の関門地域において文化財を活かした地域活性化を進めていくに際して、どのような課題があるのかという点についてお話しをうかがっていききたいと思います。

先ほど、南さんのお話しの中で既に課題について触れていただいたところでもございますが、他にも色々な課題があると思います。それについて、皆様からお話しいただければと思います。黒木さんからお願いいたします。

〔JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏〕

先ほど関門海峡日本遺産協議会さんの話でもありましたけれども、日本有数の滞在型観光地を目指すという目的は、本当に私もそのとおりでございますし、実際、そうしていきたいと考えております。その中で2点、課題を考えております。

まず1点目でございますけれども、関門エリアは歴史ですとか建物ですとか、日本有数のコンテンツは非常に多いと思います。その中で、それをどのように情報発信していくかというところ、これは私自身も、なかなか難しいなと悩んでいるところでもあります。ホテルとしても、情報発信はしているつもりなのですが、なかなかうまくできていないなというところもありますし、色々な団体等々、情報発信する機会はあると思うのですが、情報がかなり多くて、どういう情報を見れば、初めて来られる観光客が一番分かりやすいのかというところは、常に考えております。

2点目は、これは実際、門司港で仕事をしたり、ずっと一日中いたりして思っていたのですが、平日、土日とも、昼間の観光客の方は非常に多いのですけれども、どうでしょう、

私の肌感覚では、ピークは大体 13～14 時くらいではないでしょうか。グランマーケットとか色々な大きなイベントがある時はそうでもないかもしれませんが、通常の平日・土日だと、その時間を過ぎるとどんどん観光客の方が減って行って、大体 18 時くらいになるとほとんどいっしょにいないということが見てとれます。文化財も、その特徴から閉館時間がありますので、なかなか遅くまで開けていくのは難しいと思いますけれども、滞在型の観光地を目指すというところでは、午後あるいは夜を、観光客の方にどのように楽しんでいただくかということが課題だなと感じております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは次に、北九州市の泊さん、お願いします。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

私もほぼ黒木社長と同じような内容にはなるのですが、まずは観光の目的地として関門地域の認知度、知名度を高めて集客を増やしていくということが、まずは課題だと思っています。よく色々な所に行って、市外の方、特に遠方の関西や関東の方と話していると、関門地域全体のイメージというものが定まっていなと感じることがあります。

例えば、日本遺産ですとかレトロ、フグ料理、関門海峡など、そういう断片的で単体の情報というのは結構皆さん知っていらっしゃる、持っていらっしゃるのですが、それが一つのエリアにぎゅっと集まっていて、ちょっと独特の雰囲気もあって、いい観光地として存在しているというところがなかなか伝わっていないのかなと感じています。本当に旅行の目的地として関門地域を選んでもらうためには、もっと分かりやすく強く印象付けるような PR 策というものを戦略的にやっていくことも必要なかなと思います。バラバラと色々なものがあるのですが、すべて同じ強さで出していくというよりは、戦略的にやっていく。ちょっと自分の仕事の反省も含めて、そう思います。

それから勿論、黒木社長もおっしゃられているように、来ている方により長く滞在していただいて、飲食や宿泊を増やしていただいて経済波及効果を高めるという取組みも、やはり地域の経済の活性化にはとても重要だと感じています。

そういうこともありますので、行政としましても、今、夜まで滞在していただくようにライトアップを進め、「夜景がきれいなまち」ということで北九州全体で夜景を売りにした PR を進めていたり、それから、食としてもフグだけではなく色々な海鮮が採れるということで、井のおいしいお店、お寿司屋さん、そういったものも PR して、文化財プラスそういう人を引き付けるような素材を組み合わせる情報発信を行っています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは、北九州市立大学の南さんから、追加で課題等があればお願いします。

〔北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類 4 年 南 祐輔〕

私は先ほど幾つかの課題を述べましたが、ここではより文化財に絞った課題といたしまして、景観的な面で課題があることについて話したいと思います。

今までは門司港レトロの狭い範囲ですとか、下関の唐戸のかなり狭い範囲でしたが、「関門“ノスタルジック”海峡」に登録されているスポットは、42の文化財が下関・北九州のかなり幅広いエリアにあります。これまで有名なスポットで知られている場所があるかと思いますが、今回、登録されたことで新たに認知されるようになったスポットに行っても、すごい文化財、歴史的価値としてどれだけ素晴らしいものであったとしても「建物が古いのかな」「レトロなのかな」というだけになっている場所があるかと思いますが。そのスポットに行っただけで、どれだけその価値を伝えることができるかというのが課題なのかなと思っています。

「関門“ノスタルジック”海峡」も説明板がありますが、先ほど泊さんからありましたけれども、今、個人の観光が進んでおりますので、個人の観光客の方が、足をわざわざ伸ばしたくなるような取組みが必要なのかなと、私は考えています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。今のご指摘のあった部分は、関門海峡日本遺産協議会で色々事業を展開していく上でも、非常に悩ましく感じながら取り組んでいるわけですが、協議会事務局としてもご活動されている藤本さんから、課題などについてお願いします。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

確かに、文化財を活用して観光に結び付けるというのは、一朝一夕ではいかないなと考えております。先ほど、黒木社長さん、それから泊係長さんもおっしゃっていましたが、情報発信が溢れ過ぎていて、私たちも一生懸命発信しているのですけれども、それが埋没していくところと、看板、説明板、総合案内板も付けさせていただいているのですが、結局、気付いてもらえないというのが、一番今悩ましいのかなと思います。看板は、今年の3月までに一応全部、日本遺産構成文化財の方に設置いたしまして、そちらにQRコードを付けまして、そこからホームページに飛んでいただいて、そのホームページにいけば音声ガイドが聞けるとなっているのですけれども、もう一仕掛けというものがないと、そこまでたどり着いてもらえないのかなというのが今の悩みです。

ですので、環境は整ったと。あとは、そこに気付いていただくには、やはり観光ボランティアガイドさんにガイドの中で触れていただくとか、もう少しホームページ上や色々なところで、「ここにあります」というのを、まず周知し、届けるような仕掛けをしていかないといけないのではないかなと思っています。

文化財としましては、実はまだまだ知られていない、市民の方にも知っていただいている文化財がたくさんありまして、例えば下関市の旧秋田商会ビルはメインストリートの国道に面しているのです皆さん目にしているのですが、そこを入れる施設とは知らなかったという市民の方もまだまだ多く、入ったことはありませんという方が多いので、そういった地道なところから市民に対しては周知し、遠方から来ていただく方にも行政や協議会がきちんと整えている環境に気付いていただけるPRというものが必要なかなと思っています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それでは下関市立大学の福田さん、お願いします。

〔下関市立大学 経済学部国際商学科4年 福田 悠美〕

私も、皆様がおっしゃられていたことと同じように、魅力の発信の仕方は大きな課題なのかなと思っております。先ほどからもあるように、すごく歴史的に価値のある文化財がたくさんあるのですが、その魅力をしっかり分かっていたいていないこととか、市民の方にもまだまだ知られていないこととか。そして、関門地域なのに、下関側の人は北九州側のことは知らなかったり、反対に北九州側の方も下関側のことはよく知らないというようなこともあるのではないかと感じております。

私自身、日本遺産探Q会の活動をしてきて、さらに大学生として、そして下関市民として、やはり北九州のことにまだ詳しくないので、もっと両者が互いのことを、まずは地域の一員として、全体として知り合うことが大事なのかなと思いました。活動していく中で、北九州側のほうも大学生の方が活動なさっていらっしゃるのですが、私たちもまだ交流がしっかりできていなくて、お互いの活動を把握できていなかったり、そもそも面識がなかったりという部分があるので、魅力をどんどん発信していくためにも、しっかり地域同士が交流して、一緒にやっていくという意識を持っていかなければいけないのではないかなと感じております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それぞれのお立場から様々な課題についてご指摘をいただきました。



会場の様子

6. 論点4： 関門地域で求められる今後の取組（まとめ）

〔北九州市立大学 南 博〕

最後の論点です。今お話しいただいたような課題を踏まえて、関門地域の文化財を活かした地域活性化をいかに進めていくかというアイデアや方策、あるいは取り組むべき方向性について、今までのお話の中でも既に言及いただいておりますが、改めて皆さん方からお話をいただきたいと思います。まずは北九州市立大学の南さんのほうからお願いします。

〔北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類4年 南 祐輔〕

今後の取組みといたしまして、2点挙げたいと思います。1つ目は、先ほど藤本さんのほうからありましたけれども、まだまだ知られていないスポットやエリアを拾い上げていくことが重要なのかなと考えております。例えば、先ほど紹介した修学旅行の活動で、門司港の昔の古地図を見る機会がありまして、日本銀行が門司港にあったことですか、それ以外にも歴史的価値のある建物が古地図を見るとあるのですが、その地図に照らし合わせて現在の場所を見ると、マンションが建っていたりするところも、今は面影のない場所ですけれども歴史的価値がある、というように、現在残っている建物だけではなく、現在建物が無い場合でも、眠っている価値や魅力を掘り起こしていけば、ノスタルジックのストーリーがより深くつながっていくのかなと考えております。

もう1つは、今、福田さんからありましたけれども、若い世代の交流です。私も下関に住んでいますけれども、どうしてもまちづくりの活動は北九州ばかりで、なかなか下関の方で取り組むことができいていませんでしたので、まちづくりに取り組む若い世代をいかに増やしていくかということが重要なのかなと考えています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。それでは、下関市立大学の福田さん、お願いします。

〔下関市立大学 経済学部国際商学科4年 福田 悠美〕

先ほどの発表でも少し触れたのですが、今後の取組みとして、やはり関門地域でしっかり連携して魅力を発信していくために、大学生としては、北九州の大学の方としっかり交流を行っていきたくて思っております。北九州には若松地区に一度、日本遺産探Q会としてフィールドワークに訪れたことがあるのですが、それ以外に行ったことがないので、調査であったりヒアリングであったり、そういった部分も連携しながら行っていったら良いかなと思っております。

さらに日本遺産探Q会としても、これからどのような方向で下関市の方だったり北九州市の方だったり行政の方と一緒に活動していくかという方向性がしっかりと定まっていけないという課題があるので、今までの活動をすごく評価していただいているので、これからはご期待に添えるよう、探Q会としてもしっかりと方向性をもう一度確認して、地域に貢献できるようにしっかりと取り組んでいけたらいいなと思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。今、両大学の学生の方々から、そもそもお互いどのような活動を

しているのか知らないのですが、若い世代の交流もまだまだ余地があるというお話がありました。

いま両大学、あるいは他の大学も含んだ形で、連携や交流のプラットフォーム、仕組みというのは色々な形のものでできていて、それぞれ目的に合わせた色々な活動が行われ、成果も上げているところなのですが、今後の持続可能な若い世代の交流や、それをベースにした文化財を活かしたまちづくり等を進めていくうえでは、おそらく若い世代の自発的な交流をより良い形でいかにつくっていくかということが重要なのではないかと思います。そうしたきっかけを、両大学の組織や教員等がつくっていくかということも重要だと思いますし、それぞれの学生が今後また力を発揮してもらえればいいなと思った次第でございます。

それでは黒木さん、お願いします。

〔JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏〕

私からは2点です。事例も含めてですけれども、まずは情報発信というところが課題としてあったと思います。私どもも今、ホテルとしてホームページ、Facebook、Instagramなど、ありとあらゆるものをやっていますけれども、なかなか難しいところもあります。観光のお客様がどのようなものを欲しておられるかということも、なかなか伝え切れていないところもあると思います。今、特に海外の方も検索されますので、検索する所に外国語にも対応しているAIで「お勧めはどこですか」と入れると自動的に返答してくれる、難しいことにつきましては人が対応するといったサービス等もありますし、もしかしたらGoogleさんとか、そのうちそういうふうになるかもしれません。とにかく市全体、あるいは関門地域全体で、何かそういうポータル的なものがあればいいなと感じております。

2点目の集客、イベントというところでいきますと、先ほど夜のライトアップというものもありましたけれども、もう少し何か進めたものはないかなというところで、やはり歴史的建造物と合うものは自然とも合うのですけれども、アートとのコラボみたいなものが何かイベントとしてできないかなと思います。例えば、瀬戸内国際芸術祭をみると、自然という面もありますが、非常に建物とアートは親和性があると思います。かつ、夜ですとデジタルアートのチームラボさんのイベント等を見られた方もいらっしゃるかもしれませんが、夜のイベントで非常に集客されています。そういったものも一つ参考になるのではないかなと考えました。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。下関市教育委員会の藤本さん、お願いします。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

今、先ほどから情報発信という話を何回かしておりますけれども、関門海峡日本遺産協議会では独自のホームページ、それから国が全体でやっております日本遺産ポータルサイト、そしてFacebook、Instagram、Twitterで情報発信をしております。去年の事業でも行いましたが、今、インスタグラムフォトコンテストをさせていただいて、Instagramは随時、今でも「#のすたる関門」を付けて募集をしております。その中で、ずっと何と

なく思っていることがあります。例えば、地元の方がどんどん良いスポットを上げてきていただいております。今日の配布物のチラシもインスタグラムフォトコンテストの大賞受賞作品をそのまま使わせていただいているのですが、実は、このスポットというのはこの方だけではなくて、色々な方が「#のすたる関門」を付けて上げていただいているところです。その SNS の情報を見ると、何となくなのですが、皆さんが魅力を感じるエリアというのはわりと重なるものだな、ということを感じながら現在自分たちが収集している中で思っているところです。なので、そういったものを少しマップに落とし込んでいくだけでも、Instagram のスポットマップみたいなものは日本遺産だけでもできるかなと、少し思っています。それは考えているだけなのですけれども、実感として、皆さんが良いと思う景色、それからインスタ映えのするスポットというものは確実に存在していて、「文化財のこの町並みと景観」というものがあるのも間違いないと。Instagram を活用していくことによる情報発信も、やはり有効なのではないかと思っています。

それから、地域の交流としては、関門地域としてやっていると、やはり両岸でやっているの、お互いが対岸に目が行くように少しなっているのかなと思います。Instagram の投稿写真を見て、北九州の方が下関のほうに来て「いい所ですね」と言って、写真を上げてくださる数が増えてきて、また逆も多くなっています。地道ですけれども、そういう活動もやはり有効なのではないかなと。これが東になって分母が増えていけば、海外の方の目にも止まるのではないかと考えております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。ちなみに、先ほど黒木さんから建造物とアートのコラボといったことをもっと進めていくべきではないかというご指摘がありましたが、関門海峡日本遺産協議会では、関門海峡キャンドルナイトにおいて、実行委員会さんと連携した取組みを進めて、少しアートと建造物のコラボを夜のイベントとして開催するといったようなこともやりつつあるところです。藤本さん、このキャンドルナイトのことについて、昨年どういう取組みをされたか、これは日本遺産探 Q 会さんにも関係しておられますが、少しご紹介いただけるとありがたいのですが。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

関門海峡キャンドルナイトというのは、11月に行われていまして、ちょっと私も最初のほうはよくうかがっていないのですけれども10年くらい前から門司港の方で始められているのだと思います。それで、門司港側だけでされていたのを、3年前から下関側も声を掛けて、唐戸地区を中心に徐々にその広がりが広がって行って、もともと門司港キャンドルナイトだったものが、今は「関門海峡キャンドルナイト」にしましょう、という流れになっております。

それで去年、少し日本遺産として関わらせていただいて、その時に下関市立大学の日本遺産探 Q 会さんにお声掛けさせていただいたところ、探 Q 会さんのほうが構成文化財の1つである下関南部町郵便局の中庭で、文化財ですので火が使えないので LED を使って、キャンドルで日本遺産探 Q 会のロゴマークを作られて、ご自分たちの PR をしつつ、文化財の PR も一緒にする。そして、「文字を探そう」というゲームをされて、それが各構

成文化財を周遊する仕掛けになっていて、一昨年よりもかなりの方が構成文化財を回るという効果を出されました。地元の唐戸地区のほうでも大変評価が高かった取組みをしていただきました。

その延長線上で、今年も何か一緒にできればいいなど、今、思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。今お話しいただいたように、色々な要素を組み合わせ、それぞれの文化財の魅力、あるいは地域が持っている様々な資源の魅力を、より多くの人たちに知っていただく機会を提供していくこともできるのではないかと思います。

それでは、北九州市の泊さんから、関門地域で求められる今後の取組みなどについてお願いします。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

日本全国、海外を含めて遠方からの集客を図っていくには、そういったアートのイベントとか、ビエンナーレ、トリエンナーレを全国的にやっている所もありますけれども、そういう集客力の高い大型なイベントを継続的にやっていくことは、地域イメージを高めていく上ですごく重要なこと、いい取組みになるのではないかと思います。

それから、皆さんと重なってしまうのですが、情報発信とかPRですけれども、こういうことをやっていくにあたって、まずはあらゆる層に向けて、大金かけてテレビのCMとか頻繁にできればいいのですけれども、それはなかなかできるものではないので、やはりターゲットをはっきり設定して、それに合わせた媒体とか内容をうまく使って確実に届けていくような、そういう戦略的なPRというものも必要なのではないかと思います。例えば文化財ですので、まずは歴史好きの方というのが浮かんでくるのですけれども、比較的年齢層も高めでお金と時間に余裕がある方に親和性の高い観光素材になると思いますので、今、構成文化財の中にふぐとか金鍋（料亭）とか、少しお高い「食」とかも入っていますので、そういう方に伝わるような媒体を選んで、じっくりと魅力を伝えていくような、そういう広報も有効ではないかと思います。

それから、若い世代に対してなのですけれども、2～3年前に作りました「COME ON! 関門!」というYouTube動画がありまして、関門橋の下に突然怪獣が現れるというようなストーリーですけれども、一流の作り手さんが作った映像で、こちらがすごく流行しており全世界で見られておりまして、先日、再生回数が1億回を突破するというものすごいヒット動画になっています。ただ、これは怪獣動画として見られている側面もあるので、こういったものを実際の誘客につなげていって、インバウンドの方へも知名度を高めるといった仕組みも考えていかなければいけないかなというふうに考えております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。それぞれのお立場から、今後の文化財を活かした関門地域の活性化に向けた方向性について、お考えをいただいたところでございます。今ご発言いただいた中には、これからまた力を入れていくことによってさらに効果を発揮できるものとか、あるいは新たに取組んでいかなければいけないものなどもたくさんありました。関

門地域は、様々な主体がそれぞれ活発に活動しておられるところです。そうした活動主体が連携して協働していくことで、さらに地域活性化に大きな力を発揮できていくのではないかなと思う次第でございます。

当然、文化財だけで地域活性化を志向することもありうるのかもしれませんが、他の様々な要素といかに絡めていくかということが重要なのではないかと思います。こうしたことに関して、本日パネリストの皆様から、非常に興味深いご意見や活動報告をいただけたと思う次第です。

7. フロアとの質疑応答

〔北九州市立大学 南 博〕

もしパネリストの皆様の中で、お互いに何か質問をされたいことはございますでしょうか。特には大丈夫でしょうか。

それでは、あと若干時間がございますので、本日ご参加いただいた方々との意見交換をさせていただきたいと思えます。ご発言のある方は挙手をいただきまして、私が指名させていただきますので、お名前をおっしゃっていただいた後にご発言いただければと思います。いかがでしょうか。では、そちらの方、お願いします。

〔質問者A〕

すみません、大学教員のAです。私は福祉の研究と同時に、観光についても研究しております、多いのですけれども4つ質問させていただきます。4つというのは、パネリストの方々にそれぞれ分けています。

1つ目は、学生のお二人に質問させていただきます。私も今、唐戸で「カラトンファクトリー」ということで、唐戸のゆるキャラを作ってゆるキャラグランプリにも出したりすることをやっています。ところが、ほぼやり始めて8、9年経つのですが、一つの課題として出てくるのが、実はその取組みの持続可能性なのです。これは、別に学生だけではなくて、例えば豊後高田に行って、観光の方にお聞きすると、やはり10年経つとテンションが下がると言われます。ですので、学生のお二人にお伺いしたいのは、今現在はできるのだと思うのですが、その後の学生を10年間くらい同じようなテンションで、この地域の課題について取り組むような、サステイナブルな形態をつくることは、どのくらい可能なのか。どうすれば可能なのか、ということをお教えください。

次に、行政の方、お二人にお尋ねしたいのですが、私は、実は京都の「大政奉還150周年記念スタンプラリー」でコンプリートしました。京都の二条城（の非公開エリア）に入ろうと思うと100万円寄付すると入れるのですが、スタンプラリーにコンプリートするとタダで入れるということで、行ける企画に参加し写真を撮りました。22自治体を回らなくてはいけなくて、その時に聞いたことがあります。観光・文化に関しまして、観光物や産業観光に関するものを、文化と経済を観光の目線で見たときに、行政の区割りの中で教育委員会と観光部局の対立構造になり、どちらにウエイトを置いてこの事業に取り組むのかというのが、結構自治体によって異なっています。この点について、どちらを主に考えたら比較的この事業に取り組みやすいのでしょうか。それに加えて、北九州市と下関市の行政の、歴史や日本遺産を活用した取組みの違いについて、もし感じられるところが

あれば教えていただきたいということです。

3つ目は、民間の黒木さんにお尋ねしたいのですけれども、日本遺産をいかに推し進めていくかという点でインフラ的な話が多かったのですが、私が色々な有識者とお話ししていると「リピーターになる動機は、モノではない。人である」と言われます。最近の観光客の中でも、「ひとづくり」が非常に問われていて、その「ひとづくり」とは何かというと、ライトアップとか何かをすることではなくて、そこに住んでいる住民を観光物の一資源として扱う。ということは、住民の人たちが観光資源の一つなので、コミットするのは観光資源ではなくて、住民の人たちとか、アドバイスなり観光について何か説明する方々であるとか、そういったことの人材育成というものが多分必要になってくると思うのですが、その点についてどう思われるでしょうか。

それにもう1点、夜のライトアップの話が多く出されていたのですけれども、実は「朝はどうするのか」ということです。例えば函館市は夜の百万ドルの夜景のあと、朝市をやるのです。だから函館に泊まるのです。だから、夜景を見るため、夜にするだけだと、帰って博多に泊まってしまうのです。下関も北九州もそうですが、宿泊を取られています。お互いが取り合っているのではなくて、博多に取られています。ですので、博多に取られないためには、下関、北九州なりで、夜と朝の連携をして、夜に泊まって朝もこの地にいるから宿泊するんだ、というインセンティブをいかに与えるのが重要だと思うのです。そのような朝の事業に関して、民間の目線から何か取り組まれたらいいのではないかというようなことが朝市以外で何かございましたら、教えていただければと思います。

多くの質問で申し訳ございませんけれども、皆様にご質問させていただきます。



質疑応答の様子

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。では、1つ目のご質問、学生主体の活動をいかに持続可能にやっ
ていけるかという点につきまして、まず下関市立大学の福田さんからお願いします。

〔下関市立大学 経済学部国際商学科4年 福田 悠美〕

この活動を持続していくためにということですが、私としては2つあるかなとい
うふうに思っております。

1つ目は、しっかりと自分たちの活動の成果を目に見える形で残していくということが
大事かなと思いました。昨年作ったかるただったり、紙芝居だったり、あとポスターやパ
ンフレットというものは、しっかりと目に見えて自分たちが活動してきたという証拠にな
りますし、それを様々な場面で展示していただける、活用していただけるというのは、自
分たちとしても活動のやりがいを感じる場面になります。そういったものを、どんどん
蓄積していくことで、これからもしっかりと活動に取り組んでいこうという思いであったり、
先輩方がやってこられたことを受け継いでいきたいという、後輩たちのモチベーションに
もつながるのかなというふうに思いましたので、まずはしっかりと目に見える形で活動の
成果を残していくことが、持続のために重要かなと思います。

もう1つが、先ほどからも何度かお話しに出ているのですが、交流するということ
になるのですが、これは先ほどのように、地域ごとの学生間の交流はもちろんそうなの
ですが、それだけではなくて、地域の方とか自治体の方ともしっかりと連携して、
関係をつくっていくということが、すごく大事なのかなと思いました。学生同士であれば、
地域を越えて一緒に頑張っている仲間がいるという気持ちだったり、地域の方や行政の方
と関わるということも、ずっと一緒に活動してきた頼れる大人たちを持つことで、これか
らもどんどん活動の幅を広げて一緒に協力しあっていこうという気持ちが生まれたりです
とか、そういった関係も活動に対するモチベーションになるのではないかと考えました。

成果物をしっかりと目に見える形で残すということと、交流を活発に行っていくとい
う2点を継続していくことで、活動としても持続が可能なのではないかなと思いました。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。では、北九州市立大学の南さん、お願いします。

〔北九州市立大学 地域創生学群地域創生学類4年 南 祐輔〕

持続可能性、テンションが下がるという部分について。こうして関門エリアですと下関
市立大学や北九州市立大学でまちづくりや地域創生、地域活性化に取り組んでいる学生は
多いのですが、どうしても卒業後にまちづくりに携わることを、私の感覚としては断ち切っ
てしまう学生が多いように感じます。

もちろん卒業後、それぞれの場所で就職しておりますので、なかなか地域の活動に取り
組むということは難しいかもしれませんが、せっかく大学の4年間で、あまり他の若い世
代がやってこなかった、見つけてこなかった素晴らしい取組みをやってきておりますので、
地域活動に取り組んできた学生、若い世代が卒業後も継続して取り組んでいくことができ
れば、後輩である大学生とも連携し、地域の人とつながっていくことができるのかなと考

えています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。参加者の方からのご質問というのは、当然ながらパネリストにとって事前に準備されていた質問ではないのですけれども、それに対してパネリストの学生の方は非常に的確に答えてくれたと思います。こうしたしっかりとした学生が関門地域で学んでいるということ、今日ご参加いただいた方々にも大変心強く思っていたいたのではないかと思います。

それでは2つ目のご質問ですが、行政内部の部局間の話ですとか、あるいは北九州と下関の両市の取組みの違いですとか、お話しいただける範囲でお話しいただければと思います。まず、藤本さんからよろしいでしょうか。

〔下関市教育委員会 教育部文化財保護課主任 藤本 有紀 氏〕

質問者からご指摘いただいたとおり、観光の分野では、文化財、観光、まちづくりとか総合企画とか、色々な部局が関わっています。自治体によって違うというのも十分わかります。日本遺産ひとつとっても、日本遺産連盟という組織がございますが、そこに出てくる自治体の職員も色々な部局の人が関わっていて、どこが主でやっているかは自治体によって違ってきます。

個人的な考えですが、日本遺産に関しては文化財がメインで、ストーリーづくりや文化財的な価値付けを行うところは文化財が担当しているのですけれども、なかなか自分の肌感覚でいきますと、観光という面が非常に増えているところがあるので、観光、まちづくりとかの施策に関係ある部局が取り組む方が、結果としてうまくいくのかもしれないと思っております。ただ、やはりどこか1つの部局だけということではなくて、先ほど大学生のお二人に言っていただいたように、これからは連携が絶対必要。よく「横串を刺す」と言われるのですが、本当にそれが真に必要なというのを、しみじみと感じております。色々な条件があるのですけれども、意識としては「連携したい」とみんな思っていると思います。

次に、外から見ると「縦割りだな」と思われると思うのですが、特に下関と北九州の文化財部局は、月に1回交流しておりますので、こういう流れを消さない形で続けていくことで、最終的に良い方向に落ち着いていくのが理想でないかなと思います。それは、行政間だけではなくて、民間であるとか、地元で活動していらっしゃる方、それから大学。まさしく産官学民とよく言いますが、それが机上ではなく実際にうまく連携していけば、間違いなく良いものができるのではないかなと思っております。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。では、泊さん、お願いします。

〔北九州市 産業経済局地域・観光産業振興部観光課係長 泊 圭子 氏〕

北九州市でも文化企画課さんが文化財としての保護ですとか、そういう色々な取組みをされておりますし、私どもは産業経済局の観光課という立場でPRとかをしているのです

けれども、一般の会社さんと似たような感じで、やはり売り物の素材として、文化財、観光素材というのが存在して、その磨き上げですとかそういったところは文化財の担当部署がやって、私たちは言わばセールスマンみたいな、広報課とかセールスの営業をやる部門というような位置付けで連携しているようなイメージです。順序としては、やはり磨き上げを行ったものを私たちが外に売っていく、PRしていくというような形になります。

共通して言えるのは、行政機関であり営利企業ではないので、「お金を稼ぐ」というのは産業経済局としては目的としてあるのですけれども、それだけではなく、市民の皆さんの誇りとかシビックプライドのようなものにつなげたり、より良いまちに、住んで良かったと思えるようなまちにしていくという最終的な目標は共通に持って事業をやっていると思います。その実際に事業をやっていく段階で、それぞれの役割分担でやっていくというのが、一番望ましいのかなと思いつつながら、なるべく連携を取りながらやっている状況です。

下関市さんと比べて、北九州市がどうなのかとか、そういったところは私はあまり存じ上げてなくて分からないのですけれども、今、北九州市の中はそのような感じで動いているところです。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございます。

それでは、3つ目と4つ目のご質問についてです。黒木さんに、民間企業としてのお立場から、現在着目されている体験型・交流型と言いますか、「人との交流」の観光をどう捉えるのかということと、夜景など夜の色々な取組みはされているけれども朝はどうするかといった点について、お願いいたします。

〔JR九州ステーションホテル小倉(株) 代表取締役社長 黒木 俊彦 氏〕

まず第1点目の人づくり、あるいは人の触れ合いという部分ですけれども、先程からお話しをいただいている北九州市立大学生の南さんと下関市立大学生の福田さんに引き続き続けていただければ一番いいのではないかと非常に思うのですが、先ほどありましたように、どうしても働き始めると時間がない等々もありまして、なかなか難しくなっていくのかなと思います。その分、今はボランティアの方が一生懸命ガイドをやっていて、非常に好評をいただいていると思います。

では、それらにどのように民間企業として関わっていくかということで、色々私どもも考えてはいるのですけれども、一番近いのは、下関の唐戸に今度できる予定の星野リゾートさんの「OMO 下関」というホテルが、東京とかでやられている「OMO レンジャー」という仕組みがありまして、泊まっている方に対して色々なコースをガイドするということで、先般私も行ってきまして勉強してきました。私は、酒場コースを選びまして、夜の酒場に連れて行っていただきました。初めて入る所はなかなか一見さんは入りづらいと思うのですが、ガイドの方がいらっしやると入れるということもありました。色々なコースがあるみたいですが、それに近いようなことを何かできないかなということで、会社のメンバーも色々探しているのですけれども、ちょっとまだ実現していないところです。ただ、自分たちがそうしたことをすることによって、知ることもできるし、改めておもてなしを考えることができるのかな、ということで、引き続き深めていきたいと考えており

ます。

あともう1点、「夜だけではなくて朝も」という点ですけれども、これは先ほどの「宿泊の方と何か一緒にできないか」ということと一緒に考えていまして、例えば、朝ジョギングと一緒にできないか、ですとか、ジャストアイデアなのですけれども、例えば門司港・下関ですと、1時間だけでも釣りを一緒にできないか、とか。そういうことが、一つひとつアクティビティとなって、触れ合いも増えるし、夜ですとか朝の活性化もできると。そういったジャストアイデアみたいなものを、今後も少しずつ増やしていきたいと考えています。

〔北九州市立大学 南 博〕

ありがとうございました。まだご質問がお有りの方がおられたかもしれませんが、所定の時間となってしまいましたのでシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。

本日、パネリストの皆様方からもお話を頂きましたし、あるいはご参加いただいた皆様も既にご存じのように、関門地域には様々な歴史的資源、文化的資源がございます。そうしたものを今後、どのように地域活性化に活かしていくか。経済的な面もそうですが、シビックプライドなども含めて地域社会の活力向上にどう活かしていくか。あるいは人口減少が進む社会において、それを少しでも緩和したり、対応したりしていくことにどう活かしていくか、ということについて、関門地域には今後、様々な可能性があると考えております。

本日お集まりの皆様にも、今後も文化財を活かしたまちづくり、地域活性化に向けて、色々お考えいただき、あるいは発信・活動いただければと考えております。本日はどうもありがとうございました。

〔以上〕